



Title	点字使用生徒に対する漢字指導
Author(s)	岩木, 直人
Citation	札幌国語研究, 2: 57-61
Issue Date	1997
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2608
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

点字使用生徒に対する漢字指導

岩 木 直 人

盲学校に勤務して十二年が経過した。この間、入学してくる生徒の障害の度合い、個々の生徒の気質などに少しずつ変化が見られるようになった。しかし、何といつても一番大きな変化は技術面、すなわちパソコンの進歩にともなう情報処理能力の飛躍的な増大であろう。これによって、点字を使用文字としている者でも普通文字使用者と同じように漢字かなまじり文を読み書きできるようになった。もちろんそのためには、機器の操作以前に漢字についての十分な知識を持つてることが前提となる。盲学校の教育に求められるものの質も、おのずと変わっていかざるをえないことになる。ここでは点字使用生徒に対する漢字指導の現状を整理しつつ、今後の課題について検討していきたい。

本稿は盲学校の教員のみを対象としたものではないので、はじめに点字というもののしくみについて簡単に触れさせていた
だきたい。点字はサイコロの六の目とほぼ同じような、一列に
三つずつの二列、合計六個の点の組み合わせでできている。こ
の六つの点がすべてそろっているものが「め」を表し、左列の
一番上の点だけだと「あ」を表すという具合である。組み合わ
せ方によって、清音、撥音、促音はすべて表すことができる。
ただし、濁音、半濁音、拗音については二文字分のスペースを
必要とする。また、長音についてはひらがなの表記と異なり、
長音符というものをもちいて表記する。たとえば「通行(つう
こう)」を点字で書くと、「つーこー」となる。もうひとつ、「は
や」「へ」を「わ」「え」と読む場合には、音のとおり「わ」「え」
と表記する。つまり、「私は」は「わたしわ」となり、「町へ」
は「まちえ」と表記することになる。余談になるが、江戸川乱
歩の短編「二銭銅貨」はこのシステムを暗号文にもちいた作品
であった。

この六点式の点字はもともとフランスで考案されたもので、欧米諸国にはさほど問題なく普及していったが、日本語に導入する場合には大きな問題があった。いうまでもなく使用する文字数が違いすぎるのである。欧米の諸言語では二十数文字分の点字があればすべての単語を表記できるが、日本ではその倍以上の点字が必要となる。日本における点字の創始者である石川倉次は、結局さきに述べたように濁音、半濁音、拗音に二文字分のスペースを使うことでこの問題を解決した。

三

以上に述べてきたことからわかるように、点字はすべて「かな」書きであり、漢字かなまじり文は書くことができない。そのため同音異義語の識別などにおいてきわめて不便である。また、点字を使用する者どうしであれば問題はないが、普通字を使用する者と独力で文字によるコミュニケーションを図ることはできない。点字使用者が普通字使用者に手紙などを送る場合にカナタイプをもちいることが多かったが、これは自分が書いたものを確認できないという欠点があった。そこにパソコンが登場したことは、和田浩一氏が言うように「盲人にとって、文字文化における情報革命ともいえる出来事」（「視覚障害者のパソコン利用」愛媛県立松山盲学校研究紀要・平成7年3月）であった。それまでも音声を利用した盲人用のワープロがあったが、これは入力に漢点字という特殊な点字をもちいており、使用するためにはまず複雑な漢点字（六つの点または八つの点の

組み合わせにより漢字を表したもの）を覚えなければならなかった。これに対してAOKをはじめとする現在の盲人用ワープロは、普通の点字と同じ六つの点で入力したものを変換して漢字かなまじり文にできるものである。また、画面の文字を音声で読み上げてくれるとき、同音の文字については音訓読みや熟語による説明読みによって識別できるようにしている。これによって視覚障害者が独力で普通字の文章を作成し、普通字使用者とコミュニケーションを図ることが可能になったわけである。

四

昭和六十年代、点字を使用する生徒にも漢字の知識を定着させるべきだという声が高まってきた。来たるべきパソコンの時代がはつきりと見えていたわけではないが、視覚障害者が健常者と対等なコミュニケーションをとっていくためには、どうしても文字の問題を解決しなければならなかった。そのため、養護・訓練の時間を中心に、さまざまな形で漢字の指導を行うようになっていった。

そのひとつが、立体コピーをつかった文字指導である。これは、社会科学の地図などにもちいられる浮き出るコピーで、漢字の形をそのまま触ってたしかめることができる。また、かたわらに点字でその漢字の読み方、用例などを記載しておくことで、健常者が実際に使っている文字を学習することができた。この方法によれば、漢字がさまざまな部首の組み合わせによって成

り立つものであることが容易に理解でき、そのことは意味の理解にもつながってゆく。しかし問題は、画数の多いものになると指先で触ってこまかな部分を識別することが困難なことである。また、日常的に使用する文字ではないところから、学習量にくらべて定着が悪くなってしまう傾向があった。そんななかで、実際に点字を日常的に使って仕事をしている教員や理療師の方からは、「漢字の形まで覚える必要はないのでは」という声もあった。「記号としての漢字の働きさえ覚えられれば形は不要である」というのである。ただ、これがすべての声というわけではなく、「やはり形も必要」という声もあり、この点については今なお意見が分かれている。

昭和六十年代に実施されていたもうひとつの漢字学習法は前述の漢点字をもちいたものであった。これには六点式と八点式があり、それぞれに長所と短所があったが、漢字を記号として体系化していることから、漢字の形をまったく知らなくとも記号として覚えて使うことができた。しかし六点式と八点式、どちらをとるかで見解が分かれ、また複雑な漢点字の記号をすべてマスターできる人間も限られていたことから、コミュニケーションの手段として広く普及していくことができなかった。

五

以上のような経緯をふまえて、なるべく煩雑な手続きをとらずに、普通に点字の文章を読みながら漢字の学習ができないものだろうかと考えて試みたのが「小テストによるトレーニング」

である。初期のものとはたとえば次のようなものだ。ひとつの学級には普通字を使っている弱視の生徒と、点字を使っている全盲の生徒がいるため、その両方に対応できるようにしている。

(普通字用)

◎ 次の空欄には、すべて「イ」と読む漢字が入ります。その漢字を書きなさい。

(点字用)

◎ 次の文に使われている「イ」と読む漢字の意味を書きなさい。

- 一 (イ) 服を脱ぐ。
- 二 地(イ)の高い人。
- 三 (イ) 員に選ばれる。
- 四 容(イ)でない問題。
- 五 完全に包(イ)されている。
- 六 民族の大(イ)動。
- 七 (イ) 常な性格の人。
- 八 (イ) 大な人物。
- 九 スピード(イ) 犯。
- 十 (イ) 書をのこす。

これは同音の漢字についての使い分けを学習するもので、一回につき十題ずつ、年間に二百字を指導した。同様に同訓の漢

字についても次のような問題でトレーニングを行った。

(普通字用)

◎ 次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。また、その音読みを書きなさい。

(点字用)

◎ 次の傍線部に使われている漢字の音読みと、それを使った熟語を書きなさい。

- 一 席をシめる。
- 二 帯をシめる。
- 三 店をシめる。
- 四 首をシめる。
- 五 交渉をススめる。
- 六 入会をススめる。
- 七 名刺をスる。
- 八 マッチをスる。
- 九 送金がタえる。
- 十 風雪にタえる。

いずれの場合も一回目の授業の時に正解を予告し、二回目の授業の時にテストを実施して定着を図った。また、定期考査の時にもそれまでに学習した漢字のなかから毎回十題ずつ出題して、さらなる定着を図った。その結果として授業中においても

点字使用生徒が文字の話題に参加できるようになり、読書に対する関心も高まった。また、点字の読速度が向上した者も多かった。

六

現在はこのトレーニングを継続しつつ、しだいにパソコンによる文章の作成を学習させているが、その過程で見えてきたいくつかの問題がある。ひとつは、学習する文字の体系化をどうするかということである。点字で漢字を学習した場合、その難易度は普通字の場合とまったく異なるものになる。たとえば、「一」という漢字は普通字で見た場合、きわめて単純な一画の文字であるが、点字では「いち」とも読み、「ひとつ」とも読み、時には「統一」のように「いつ」とも読むやっかいな文字ということになる。その上、人名では「はじめ」「かず」とも読むのである。小学校での学習順にすべきか、使用頻度や難易度に応じた独自の体系を作るべきかという点は意見のわかれるところである。

また、ふだん漢字かなまじりの文を読み慣れていない者にとっては、どの範囲まで漢字を使い、どこからはひらがなにすればかという判断がむずかしいようである。多くははじめのうち知っている漢字を何でもすべて使おうとする傾向がある。「ように」を「様に」と書いたり、「時」「事」「物」「所」などをすべて漢字で書いたりすることは間違いではないものの、やや読みづらいものと言わざるをえない。今後数多くの文章を読みこ

なしていくことで解決させていくしかないであろう。

七

点字使用生徒に対するこれまでの漢字指導の流れを整理するとともに、現段階での問題点について触れてきた。小学校段階からパソコンに触れる機会が増えてきているところから、今後はますます指導内容の体系化が必要となってくるであろう。現場の指導者の対応が追いつかない速さでパソコンは視覚障害者の手もとに普及していった。これを十分に使いこなして、健常者と対等にコミュニケーションができ、事務的な作業ができる人間を育成していくために、点字使用生徒に対する漢字指導の重要性は今後も高まっていくものと思われる。

【参考文献】

- 和田浩一「視覚障害者のパソコン利用」(愛媛県立松山盲学校研究紀要・平成7年3月)
- 出井博之「パソコン時代の墨字指導」(盲教育80号・平成8年3月)
- 瀬尾政雄編『点字研究』(筑波大学心身障害学系視覚障害教育研究室・平成2年3月)
- 放送教育開発センター編『教師教育教材 特殊教育 一点字で学ぼう』(平成3年3月)